

性血管の多い腫瘍であり、血管平滑筋の一部は周辺腫瘍細胞と同様に泡沫状の性状を示していた。HMB-45, Vimentin で強陽性を示し、SMA 陽性細胞も見られ、肝血管筋脂肪腫と診断した。さらに、Ki-67 の陽性率は充実部では 70% 強の陽性率を示しており、malignant potential をもつ腫瘍と考えられた。血管筋脂肪腫は近年では肝原発の報告例も散見されている。組織では HMB-45 染色の特異性が極めて高いとされる。基本的には良性と考えられるが、近年では増大傾向、術後再発例の報告もある。悪性度の評価基準はまだないが、今回の症例で検討した Ki-67 標識率は今後悪性度の指標の 1 つとして活用される可能性があると考えられる。

38 発育経過を振り返ることのできた肝血管筋脂肪腫の 1 例

佐藤 里映

新潟市民病院消化器内科

症例は 60 代、女性。2003 年から肝 S2 の 20mm 大の血管腫と思われる結節を近医にて CT でフォローされていた。2009 年 S2 の別部位に嚢胞状の腫瘤が出現し、2011 年 53mm に増大したため当科を紹介受診した。血管腫は消失していた。腫瘤は単純 CT で低吸収、内部は不均一な造影効果を認めた。MRI で脂肪主体と思われた。鑑別診断には肝では稀な脂肪肉腫と脂肪を主体とする血管筋脂肪腫を挙げた。左葉外側区域切除術を施行し脂肪成分が優位の血管筋脂肪腫と診断した。血管筋脂肪腫は腫瘍の成分の割合が症例によって多彩で、針生検で診断が困難な場合がある。過誤腫とされていたが近年悪性化の報告も散見されるため、腫瘍径 5cm 以下、生検で確定診断がついている、通院コンプライアンス良好、肝炎ウイルス陰性を全て満たす場合に限り厳重経過観察可能とされる。本例は発生初期からの増大経過を画像で振り返ることができた貴重な 1 例と考え報告する。

39 乳癌肝転移に対する RFA 治療介入の現状

堀米 亮子・石川 達・窪田 智之
阿部 寛幸・長島 藍子・廣瀬 奏恵
富樫 忠之・関 慶一・本間 照
吉田 俊明

済生会新潟第二病院消化器内科

40 大腸癌肝転移に対する化学療法により門脈圧亢進症を来したと考えられる結節性再生性過形成の 2 例

中村 隆人・水澤 健・瀧澤 一休
坪井 清孝・岡 宏充・青木 洋平
松澤 純・夏井 正明・渡邊 雅史
丸田 智章*・下田 聡*・若木 邦彦**
野本 実***

県立新発田病院内科

同 外科*

同 病理**

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器内科学分野***

結節性再生性過形成は、病理組織では肝に線維性隔壁を伴わないびまん性の結節性病変が認められる疾患である。

〔症例 1〕80 歳、男性。高血圧と糖尿病の既往があった。平成 13 年に直腸癌、肝転移と診断され、低位前方切除術と肝動注用リザーバー留置をされた。以後、肝動注療法、静注化学療法が施行された。平成 15 年より門脈圧亢進症が出現した。

〔症例 2〕57 歳、女性。虫垂炎、脂質代謝異常の既往があった。平成 21 年 11 月盲腸癌、肝転移と診断され、同年 12 月回盲部切除術施行された。退院後静注化学療法がおこなわれ、平成 22 年 6 月より門脈圧亢進症を発症した。NRH では 2/3 の症例で非肝硬変性門脈圧亢進症を来すことが知られている。本邦では化学療法に伴う NRH の報告はごくわずかである。今回、大腸癌肝転移に対する化学療法後に NRH による門脈圧亢進症を来したと考えられる 2 例を経験したので若干の文献的考察を加え報告する。